

---

missing

八郎

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

missing

### 【Nコード】

N5823M

### 【作者名】

八郎

### 【あらすじ】

風の強い日、期せずして四人は感じ取っていた。  
「門が、開く」

それはすべての終わりであり、すべてののはじまり。

## 終焉の予感（前書き）

【ソウルイーター】や【BLOOD+】など、モデルにしている作品が何点がございます。

似たような部分があっても、「ああ、影響受けたんだろうな」と軽くスルーしていただければ幸いです（笑）

ソウルイーター読んだことないんですけどね。

## 終焉の予感

強い風の日だった。

轟々と音を立ててすり抜け、残暑の熱も遠く彼方までさらっていつてしまうような、そんな強い風が吹いていた。

少女の髪も乱されていた。

どこからともなく吹く風は真っ直ぐ伸びた髪を遠慮なく掻き乱すが、少女は一切頓着した様子を見せなかった。

少女の背後のカーテンが舞った。寸でのところで天井に届くほどだった。開け放たれた窓へ風は猛攻し、部屋を荒らし回るが、残念ながら、紙など散らかるものは置かれていない。

「どうした」

ただ、男に冷たい空気を送りつけた。

「動き出した」

言いながら、少女は振り向く。

雲が流れ、真ん丸い月が妙にはつきりと姿を現した。

「門が、開く」

月明かりは人形のような少女の面持ちを照らした。

強風にゴミが飛ばされていた。

ビルとビルの隙間のようなスペースには、突風のような風が吹く。この隙間は普段、ゴミ捨て場として活用されているのだが、今宵置かれたゴミは四方に散らばっている。

一際強い風が吹き、役割を果たしていないゴミ捨て場の前を、折れた傘が飛んでいった。

突然、ゴミ捨て場の奥の暗がり、がばりと起き上がった。

人の形をしたそれは、まさしく人だった。

その人はしばらくキョロキョロと首を動かすと、やがて持っていた棒を抱える動作をした。

「そんな…どうして」

そのまま暗がりにはぎれるように、再び固まった。

雲が流れ、真ん丸い月が妙にはつきりと姿を現した。

月明かりに照らされたその人は、散らかったゴミの中で一振りの刀を持つ女の姿をしていた。

僕の身体はビクンと跳ねた。同時に、呼吸ができなくなった。

友が、僕と同じ方向を見つめて声を失っているのがわかる。

信じられない。

僕も同じ気持ちだった。しかし、いくら凝視しようと、事実が変わらなかった。

You Lose

「オイオイ、まじかよ、神様。相手は伊草だぜ」

慶が僕の肩に手を置き、画面に鼻がつくのではないかというほど覗き込んできた。

僕は乾いた笑いしか返せない。

「ふ、ふん。下らない。たかが対戦ゲームで。熱くなるなよ」

と、言う伊草の手は震えている。

記念すべき100戦目、僕の100連勝で納めるはずだった。

「あんだと、伊草あ。おめえもう一回やるか。まぐれ勝ちで気取ってんじゃねえよ」

「冗談じゃない、いつまでも付き合ってられないさ。そんなにやりたいなら、藍田とやればいい」

勝利の余韻に浸っていただけだろ、と僕は突っ込む。言わないけれど。おそらく、これは格闘対戦ゲームが超得意な伊草の、人生初の勝ち星なのだ。

結局恒例の二人の口論が始まってしまい、僕は汚名を返上するこ

ともなく、ゲームセンターを後にした。

「風強っ」

慶が早々に悲鳴を上げた。慶の髪が風になびいて僕の顔に当たっていたが、黙っていた。

なんだか、今日はツイていない気がする。

といっても、僕の１７年間の人生で、幸運が訪れたことなどないのだが。

「あ…」

伊草が何事が呟いて、空を見上げた。僕らもつられて見上げる。雲間から、真ん丸い月が妙にはつきりと姿を現していた。

「お、すげえはつきり見える」

慶が僕の肩に手を回し、大きな声で言う。相変わらず、髪が僕の顔に当たっていた。

「きれいだなー」

「そうだな、なんだか近く感じる」

珍しく、伊草が慶の言うことに素直に同意し、二人して月を見上げていた。

僕もまた、珍しく自分の意見を素直に口にしてしまった。

「…そうかな」

妙にはつきりくつきり月は空に浮かんでいた。

その距離はあまりにも近く、表面のクレーターさえ肉眼で確認できそうである。

風が運ぶどこか湿った空気と、空に鎮座する青白い存在に、何故か胸中に不安がよぎり、僕は戸惑った。

## サクラサク

高校3年生の二学期というと、部活動も引退し、授業も短縮され、根っから受験、就職活動ムードになっている時期だ。

時間割も進路のために多く割かれ、放課後も自主的に進路指導室へ行ったり、マンツーマンで面接の練習をしている生徒たちがみられた。

今日も例外なく短縮授業だ。ただ、四時間目が週に一時間しかない生物の授業だった。

顕微鏡でユリの細胞を何とかという薬剤で染色し、観察するという実験を行った。

実験はクラスの席順ではなく名簿順で座る。それでも、僕と伊草は隣通しだ。

授業の終わりを知らせるチャイムが鳴ると、僕らを残して班員はさっさと教室に戻っていつてしまった。

なので、今はぶつくさ文句を垂れる伊草と並んで、廊下を歩いている。

文句は、戻ってしまった班員たちに対してだ。

「要領も悪いうえ、後始末もできないなら、子供と同じさ」

それはお前のせいだと毒づいた。言わなかったけれど。

伊草がいちいち実験の工程でケチをつけるので、僕らの班は実験結果を見るのがチャイムの鳴る寸前になってしまった。

「それじゃあ薬剤が足りない」とか「レンズで細胞を潰す気か」とか。

みんな呆れて、後半は何も言わなくなっていた。

廊下にはもう誰もいない。もしかしたら、もうHRがはじまっているのかもしれない。

先生の話の途中で教室に戻って、注目を浴びるのは嫌だった。

伊草の文句が“なぜ僕がみんなを引き止めなかったのか”という

理不尽過ぎるものにならなっていたが、タイミングを図って走って教室へ戻ろうと切り出すつもりだった。

ところが、僕の思いとは裏腹に伊草は足を止めた。

顔には、先ほど以上に渋面を広げている。

「どうした」

僕が聞いても返事をせず、廊下の先を見つめている。

僕も視線を追ってみた。

誰もいないと思っていた廊下に、まだ一人だけ生徒がいた。

腰に届くほど長い栗色の髪。

痩せ過ぎているのか、あえて大きめのを着ているのか、常に袖を余らせた、ゆったりとしたカーディガンを着ている。

「佐倉咲」

伊草が舌打ちとともに名を呼んだ。

この高校一有名で、影の薄い生徒である。

僕が1年生のときにはすでに在学していたから、同じ3年生のはずである。

しかし、誰も授業を受けている姿、登下校はおるか鞆を持っている姿を見たことはないし、行事事には当たり前のようにいない。

夏でも冬でも同じ姿で、長い髪さえも3年間狂いなかったように思う。

よく進級できるなと思うが、僕の知らないクラスで佐倉咲は授業に皆勤しているのかもしれない。

しかし、ある時、うるさい誰かが佐倉咲のクラスを先生に訪ねた。その先生は「わからない」と答えた。

それはその先生に限ったことではなく、どの先生に聞いても答えは「わからない」だった。

生徒も先生でさえも、佐倉咲の所在を知らない。ただ、当人だけ、ふらりと現れては窓の外を眺めている。

彼女の存在は、目撃される度に話題になった。

実は非常に病弱な娘で、学校に通ってはいるものの、僕らと同じように授業が受けられないのだと。

そして、そのまま亡くなってしまうが、学校へまともに通えなかった思いが無念となり、成仏できずにさまよっているのだと。

どちらも根も葉もない噂話である。

伊草は露骨に彼女のことを嫌っている。

不真面目で何のために学校に通っているのか知れず、何より得体が知れないかららしい。

僕もそう思う。

でも、そこまで毛嫌いすることはないと思う。

何を考えているかわからない。

だから、僕は彼女の考えていることが知りたい。

僕は彼女と一度だけ目が合ったことがある。

高校2年生の冬の日、バレンタインデーだった。

周りの喧騒に浮かれることなく、彼女はいつもどおり外を見ていた。

僕は義理チョコもろくにももらえない虚しさから、彼女に声をかけてしまった。

僕から女の子に声をかけるなんて、一生分の勇気を振り絞る行為だった。

「寒くない？」

バカな質問だったと思う。

それでも、彼女は振り向いた。

漆黒の瞳孔を、髪と同じ虹彩が囲んでいた。

横から見るよりも目が大きくて、きらきら光って見えた。

僕は二の句が告げなくなり、「あの、その、」と、意味のない言葉をつないだ気がする。

そうしているうちに、彼女はいなくなっていた。

彼女は今も外を見つめている。

僕や伊草など、存在すらしていないように、一心不乱に。

彼女は何を見ているのだろう。

彼女の映す世界には、一体何が…。

「何やってんの？」

「うわああああ！」

僕の悲鳴は廊下に木霊した。

振り向くと、慶がびっくりした顔で僕を見ていた。

「なんだ、君は！ 大袈裟だな！」

伊草も耳を塞ぎながら抗議した。

「わかった。エロイ事考えてたんだろ」

「なっ… そんなわけないだろ！」

隣で伊草が「バカか」と呟いた。

「あんだよ、じゃあ何してたんだよ。二人してぼーっと突っ立って」

僕は何と言っているかわからず、伊草を見た。

伊草も、僕を見ていた。

仕方なく、僕は指で、伊草は舌打ちしながら顎で廊下の先を差した。

慶はようやく合点がいったようだった。

「佐倉咲」

彼女は僕らが騒いでいるうちに、廊下の先へと進んでしまっていて、姿が小さく見えた。

「アイツ、ほんとに謎だよな」。どこのクラスにいの？むしろ、3年？」

「気持ちの悪い女だ。一体、何を考えているんだか」

「そこまで言うことねえだろ、伊草あ。女の子だぜ？」

「うるさい、何を言おうと俺の勝手さ。それより、肩から手を退かせ」

長い髪を乱すことなく、決して歩幅は大きくなく、ゆったりとした速度で、彼女は僕の前から消えた。

夢のように、幻のように。

そしてそのとき、今日の全工程終了のチャイムが鳴った。

僕たちはHRに顔を出すことなく、今日の学校を終えてしまった  
ということだ。

僕と伊草は同時に悲鳴をあげた。

## サクラサク（後書き）

「ていうか、慶はどうして僕らよりも後から？」

「オレ？ オレはその、お話してたから、先生と」

「プレパラートを2枚も割れば呼び出しもくらうことになるさ」

「あれ割れねえ？ 薄いじゃんよ」

という会話を加えようとしたが、あまりにも本編と関係がないので省きました（笑）

## 日常の終わり

下校する生徒たちに紛れて帰宅している。

自転車を使うもの、何人もの友達と連れ立っているもの、一人で帰るもの。

僕は一人で帰るものの群にいた。

伊草は予備校だそうで、ろくに会話も交わさず帰ってしまった。

HRをサボってしまったと、生真面目な彼はあれからずっと不機嫌だった。

慶は仲間と野球部に乱入するのだそうだ。

慶は僕や伊草と違って交友関係が広く、初対面の人間にもさほど緊張しないから、放課後も遊び歩いては知らない仲間を増やしている。

だからこそ、慶のような人間が僕らと友達になれたのだ。

僕の進路は進学だ。だが、十月にしてまだ受験の危機感がさらさらなく、慌てて勉強しようという気が起きない。

帰って一応参考書を開いてみるものの、結局テレビゲームに走るのだろう。

三年生になってからはこの繰り返しだ。

「ねえ、ちょっと見て」

僕のすぐ前を歩いていた二人組の女子の声が聞こえた。

ぶつかりそうな距離感なのだが追い抜けるという速度でもなく、なんとなくもどかしい思いをしていたところだった。

女の子は連れの子に囁いている。

「あの人、なんだろうね」

まさしく周囲に聞こえないよう、幾分トーンを落とした言葉に連れの女子は大袈裟に頷いた。

僕も気になってすぐ彼女たちの視線を追いたかったが、たださえこの距離感で、さらに盗み聞きしていると思われるのは嫌だった

ので、少し間を開けてからチラリと視線を上げた。

校門に生徒ではない女の人が立っている。

女の子たちが囁いたのはこの人のことだろうと思った。

なぜなら、遠目から見ても髪はボサボサで、着ている服は黒く薄ら汚れていたからだ。

浮浪者かと問われればそこまでを連想させるような容貌でもなく、ただ単に風呂が嫌いで何日も風呂に入っていないのだと思わせた。

見ていると、露骨に彼女を避けながら通っている生徒もいた。

僕もできるなら遠巻きに避けて通りたいと思う口である。

前を歩いていた女の子二人から横に逸れて離れ、斜め前に歩きながら校門を目指す。

避けたなどと思われたくないの、なるべく女の方は見ずに、全く意識をしていないとアピールをしながら歩く。

僕の腕を細い手が掴んだのは校門を抜けたくらいだった。

僕の三度目の悲鳴は声にならなかった。

目に異物が入れば瞬きをするように、全くの条件反射でその手を振り払う。

普段の僕であればそんな露骨な行動は取らなかっただろうが、そのときは完全に頭が回らなかった。

腕が自由になると冷静になり、奇行に出た誰かを確認する余裕もできた。

それは女だった。

汚れた服を着たあの女が、ぱさついた髪の間から僕を見ている。

その目があまりに真っ直ぐ僕を見据えるものだから、僕の心臓は再び跳ね上がった。

何するんだよ。

女の顔を見てそんな言葉が浮かんでしまい、僕は余計に言葉に詰まってしまった。

こういう場合、怒っていいのだろうか。

だが、腕を掴まれただけだし、あまり乱暴な言葉を使うのは場違

いな気がする。

「あ、あの…」

結局僕の口から出たのは言葉として成立しないものだった。居心地の悪さを感じながら女を見返す。

そして気付いたが、この女若い。おそらくまだ二十代だ。

髪も服も全て廃れた格好をしているのに、目だけは鋭く、僕の些細な動きでも逃すまいと監視しているかのようなだった。

きちんと化粧して整えれば可愛い顔なんだろうなと、検討違いなことを思った。

ふいに女が言う。

「これ」

思ったとおりの若々しい声だった。

トゲトゲしくぶつきらぼうで、容量を得ない。

そして差し出したのは、朱色の袋に入った棒だった。

僕は遠目からそれを見たとき、女が使う杖だと思った。

だが、違った。

竹刀だ。朱色の袋は竹刀袋である。

金色の糸で刺繍が施されているが、この女が持っていたせいかな所々黒い。

糸が解れた個所もあり、年季を感じさせるような汚れた袋だ。

古本屋に置いてあるような蔵書の臭いがしてくるのは…僕の気持ちの問題だろうか。

そうこう観察しているうちに何を思ったのか、女は僕の胸に無理やり刀を押しつけてきた。

ガツツとぶつけるような勢いで、袋の中の竹刀が強く当たり息が詰まった。

女の言う「これ」とは、これを受け取れという意味だったのだ。

僕の手に残ったのを見ると、女はそのまま踵を返し、用は終わったと言わんばかりにずんずん去っていく。

遠ざかる背中を呆然と見送っていたが、自分がしっかりと竹刀袋

を握っていることに気付くと、頭が急に冷えた。

「ちょ、ちよっと！」

声を張り上げた。

しかし、女は僕の声などもう聞こえていないかのようだ。

その背を追い、肩を掴もうとしたところで、女が振り返った。

僕が触れようとしたのを見ていたかのような絶妙なタイミングで、目が鋭く僕を射抜き、触るなど威圧する。

僕はあっさりそれに負けた。

もともと何を言おうか考えていたわけではないが、さらに竹刀袋を返すための言葉も忘れてしまい、彼女の前でただうろたえ、立ち往生した。

蛇に睨まれた蛙状態が長く続いた。

僕にとつては限りなく気まずい時間であり、五分や十分は続いたように感じた。

もちろん僕自身が感じただけで、実際は一分も経っていなかったのだろう。

ようやく彼女の唇が動いた。

かさついてて、クラスの女子のつやつやした口と同じ器官とは思えなかった。

「明日、同じ時間に」

女は再び背中を向け、僕から遠ざかっていく。

そうして、本当に去って行ってしまった。

今度は引き止めようとは思わなかった。

「いや…明日って学校休みなんですけど…」

少なからずの抵抗で、今日は金曜日で明日は登校日ではないということをつぶやいのだが、それは彼女が去った後で、もちろん誰も聞いていなかった。

結果、僕の手には竹刀が残った。

## 日常の終わり（後書き）

銀魂が書き終わったので、久しぶりに手を出してみました。

一応メインはこちらなので、みなさんこっちも見てください（笑）

オリジナルストーリーを書くにあたって、勝手にいくつかテーマソングを決めています。

この話を書きながら永遠とポルノの「クリシエ」を聞いていました。この曲のように重々しく、密度の濃い作品に仕上げたいです。

テーマは決まっていますが、現段階でそれに見合った文章力がないのが悲しい限りです。

## 道

電車に乗って、最寄り駅で下りる。

そのわずかな区間で、頭をフル回転させた気がする。

平素なら携帯ゲーム機をしてそう長くもない乗車時間の退屈を潰すのだが、そんな余裕はなかった。

僕の悩みの種は、もちろんこの朱色の竹刀袋である。

「どうしようどうすればいいんだ」と、もう何度繰り返しただろう。

剣道部でもなく、まして運動部でもない僕が、まさか竹刀を持つことになるなんて。

誰にどうしてというわけではないのだが、後ろめたい。

悪事に手を染めてしまったかのような、居心地の悪さを感じる。

僕は、これをどうすればいいのだろうか。

持ち帰る？ あんな得体の知れない人物から押し付けられた得体の知れないものを持ち帰るなんて、できるわけがない。

棄てる？ 仮にも人の持ち物だし、棄ててしまってもいいのだろうか。それに棄ててしまった後、あの女が学校に現れたらどうすれば…。そもそも、棄てる場所なんてどこにあるのだ。

いくら考えても、この竹刀を受け取ったことが間違いだったという結論にしかたどり着けなかった。

だいたい、あの女は何者なのだ。

なんだって僕にこんなものを…。

ぐるぐるぐるぐる同じことが頭を回っているうちに、電車は駅へ到達していた。

僕は駆け込み乗車ならぬ、駆け込み下車をした。

今は存外重量のある竹刀を背負って、とぼとぼ歩いている。

僕の背は丸くなっているに違いない。

電柱近くの緑の網がかかっているゴミ捨て場を見て、よからぬ考

えが過つたが、大学生らしき男性とすれ違い、逃げ出した。

結局「どうしようどうすればいいんだ」に話は戻る。

僕の自宅は目黒と恵比寿の中間にあるマンションの一室で、駅からは少し歩く。

駅前は若者など、さまざまな目的の人で溢れかえっているが、駅から離れて道を一本逸れてしまえば存外落ち着いた住宅街になる。

僕はため息をついた。

結局、ここまで竹刀を持ってきてしまった。

どうしようなどと繰り返していたが、もう持ち帰るしか選択肢はない気がする。

いや、しかし…と僕は自分で思いついた考えを否定した。

それを受け入れるには、あまりにも理不尽で悔しい。

今からでも何とかならぬものかと、その何とかが何かも考えつかないまま辺りをうかがう。

そして気付いた。

人がいない。

いつもは休日だって初老の男性や子連れの主婦とすれ違うのだが、さつきゴミ捨て場にいた大学生を見て以来、誰も見ていない。

静かだった。

何の音もしない。

僕はようやく、事態の異様さを感じ始めていた。

僕が立てる足音を除いてしまえば、この空間は無音だった。

車のエンジン音も、空調の音も、風の音も、何もなかった。

僕は足を止め、辺りをうかがった。

なんとなくではない、真剣に誰かを探していた。

この空間に自分以外の誰かが欲しかった。

右往左往、首を動かす。

しかし、いくら見渡してみても、待ってみても、ただ真っ直ぐ伸びた道が不気味に続いているだけだった。

見慣れた光景だ。

いつも通りの通学路だ。

だが、音というものを切り離してしまっただけで違う世界のような気がする。

そしてそれは、異常なほど僕を不安にさせた。

「どうなつて…」

思わず呟いたとき、背後に何かの気配を感じた。

呼吸すら感じることできそうな近い距離で、僕よりも圧倒的に大きな存在だった。

振り返る。

誰かが見ていたら滑稽なほどの慌てつぷりと、大袈裟な動作で。しかし、そこには何もなかった。

認めた途端、僕の耳に音が戻ってきた。

目の前にある自販機の音、遠くで走る車のエンジン音、マンホールの下で水がチヨロチヨロと流れる音、僕の耳に一気に入ってきた。

魔法が解けたようだった。

だとしたら、いつ魔法にかけられたのだろうか。

訳もわからず、逃げ出した。

竹刀を捨てることなど、もう頭になかった。

黒い塊が少年の足元に溜まる。

それは影のようだが、影よりも黒く、明らかな意志を持つてうねる。

しばらく水が沸騰するかのように気泡を立てていたが、やがて巨大化し、少年を喰らおうと伸びた。

途端、横から貫かれた。

塊は空気が抜けたようにしばみ、少年の足元で四散した。

少年が振り返ったときには、何もなかった。

猫は少年が走り去るの見届けた。

地面で黒がまだ蠢いているのを見て、猫の前足が爪を

立てた。

今度こそ、黒が消滅する。

「大事はないな」

猫は振り返り、見慣れた黒衣を見上げた。

黒衣は猫をまじまじと見つめていたが、やがて道の先に視線を移し、最後に迷いなくその双眸を背後の一点にやった。

「今度はあいつが後継者というわけか」

問いに答えはない。

代わりに、自販機の陰から女が鋭く睨んでいた。

## 道（後書き）

二、三ヶ月くらい書いてなかったんですね。  
うわあ…。

急に「やばい。小説を書かなくては」という具合に奮起致しまして  
本当は銀魂の方を上げる予定だったんですけど、

あんだけ書いたのに続きがまっつっつっつたく思い浮かばなくて！！

（爆笑）

なので、ほとんどできあがってたmissingから。

いい加減タイトルを変えたいのに、いいタイトルが浮かびません。

ところで、弟から「文末が『…』で終わるときは『。』はいらない」  
という助言を受け、

その通りに書いていたのですが、

最近ウソだということが判明いたしました。

ええ、単行本を読んだら普通に『…』で文末を締めてました。  
騙された。

間違ってるが多々ですが、気が向いたら直していきます。

## 重みの正体

明日、同じ時間に。

女はそう言った。

だが、それは今日が土曜日という無条件で学校に来なくても日でも有効なのだろうか。

あの女は部活動で休日登校している下級生の声を聞きながら、あの校門の前に立っているのだろうか。

のっけからこんなことを考えるなんて、どうかしている。

寝起きの頭をガジガジ掻いたが、もうどうにかなっている事態になっていると、存在感のありすぎる朱色の竹刀袋を見て再び布団に突っ伏した。

天気はすこぶる良い。

休日は昼頃まで寝ていて必ず母に起こされるのが常の僕は、久しぶりに朝日を浴びた。

だからといって、爽やかな目覚めとか、三文の得とやらを実感することもない。

僕の目には絵に描いたような隈が浮かんでいた。

僕の顔を見るなり、挨拶よりも先に「眠れなかったの？」と聞いた母がそれを明確にしている。

事実、僕はほとんど眠れなかった。

昨日、「おかえり」と声をかける母への返事もろくにしないで、自室に真っ直ぐ向かった。

不自然に思われないような速度で、だが、気持ちはずでに走り出していた。

耐えきれず強くドアを閉めた。

バタンツと家中に音が響く。

「どうしたの？」と母の声がする。

聞こえる。

僕はようやく落ち着いて、その場に座り込んでしまった。散らかった部屋の、放り出された参考書が目に入る。

アレはなんだったのだろうか。

しかし、おかしいことに、冷静になって考えてみるとなんでもないことのように思えてくる。

僕以外の誰も通らなかっただけ。

たまたま人通りがなかっただけ。

僕が神経過敏になっていただけ。

…本当に？

背筋をぞくりと何かが這いあがってきた。

毛の生えた虫のように気味が悪く、底冷えのするような…悪寒だ。

僕は身を震わせた。

そのとき、改めて手に持っていたものに気がついた。

学生力バンと…竹刀だ。結局持ってきてしまった。

僕は改めて憂鬱になり、ため息をついた。

一気に気持ち電車で乗っていた頃に逆戻りしていた。

本当に、どうしろというのだ。

睨んでも解決策が浮かぶわけではなかったが、どうにも睨まずにはいられなかった。

なぜこんなものを僕に渡したのだろうか。

ただの竹刀ではないか。

竹を結んで刀に模しただけの棒だ。

…本当に？

僕は自分で思いついた考えにぎよつとした。

僕は外側の袋しか見ていない。

実際はもっと大変なものが入っているのではないのだろうか。例えば……。

思いついたら止まらなかった。

朱色の袋を括っている紫の紐に恐る恐る手を伸ばす。

どうにも紐を掴めないと思ったら、僕の手は小刻みに震えていた。  
やめろ。

何も知らないまま、あの女に突っ返せばいいじゃないか。

僕自身が警告する。

だけど、見たい。

知りたい。

欲求は恐怖を伴いながら津波のように僕に襲いかかってきた。

そこからは、ひどく呆気なかった。

紐が解かれ、一振りの刀が露になる。

僕の脳裏に不吉に過り、そんなわけはないと必死で打ち消していたものが、いとも容易く目の前に現れた。

袋と違つて何の装飾もなく、その辺の小道具として使われていそうな変鉄もない刀だった。

ドクン

ドクン

僕の心臓は大きく動悸しはじめた。

それ以外聞こえない。

また何か起こったのだろうか。

どうでもいい。

ドクン

ドクン

刀を手を取った。

袋越しに持つよりずっと重みを感じた。  
僕は一層震えた。

ドクンドクンドクンドクン

心臓がうち震える。

全身を叩きつけるように鳴る。

僕は、

「刻也―」

飛び上がった。

きつと、マンガのように浮き上がっていたに違いない。

それくらい、ふいをつかれた。

「どうしたの？　大きな音を立てて」

母だ。

大きな音…もしかして、戸を閉じた音のことを言っているのだろうか。

「なんでもない」と慌てて返事をして、気付く。

もしか、僕が部屋に入り刀を発見してから、そう時間は経っていないのだろうか。

無限のような時間が流れた気がする。

いや、それよりも、僕は今、何をしようとしたのだ。

僕は虫や猫の死骸でも追いやるような動作で刀を蹴飛ばし、ベッドの下へと放り込んだ。

刀は部屋からその姿をほとんど消したが、ベッドの下から覗くは存在感が溢れていた。

## 重みの正体（後書き）

はーずーかーしー！！！！

4月に書いてそのまんま放置されていて、  
何の手直しもせず挙げました！！

はーずーかーしー！！

なんか、急に二次じゃないオリジナルの方の  
刻也を書きたくなっただけです。

ベースがないから仕方ないのかもしれませんが、  
やっぱり他の作品に比べると断然短いですね。  
しかも台詞がなくなっただけで読みづらい。

はーずーかーしー（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5823m/>

---

missing

2011年7月17日03時17分発行